福島支部会報 34 号

日本山岳会福島

（令和3年４月から６月の活動）

令和3年（2021年）7月15 日発行
公益社団法人日本山岳会福島支部
支部長　佐 藤 一 夫
事務局 〒960-8133 福島市桜木町 13-43
波 部 展 雄　気 付
電話(FAX)：024-533-0541
携 帯：090-2880-9805

令和３年度支部総会後の活動

令和3年3月7日、第3回目の新型コロナウイルス緊急事態宣言（1月・対象7都道府県）が、2カ月ぶりに解除されたものの、その後の感染拡大兆候は予断を許さず、「不要不急の外出自粛」「三密防止」は現在も続いている。

こうした中、4月3日、年度活動方針等を協議する「支部役員会」を開催し、「令和3年度支部総会」については、コロナ禍による書面開催を決定し、その後の書面審議により提出議案はすべて可決された。

年度第１・四半期（4～6月）の支部活動は、公益事業としての「フリークライミング講習会(5月予定)」、「登山道整備作業」は中止とした。さらに第2・四半期には8月の「山の日親子登山」、期を同じくして東京オリンピック、パラリンピックも予断を許さない現状にある。

支部草創から73年、コロナ禍の影響と会員の高齢化は、支部活動にかってない危機感を抱かせるが、今後ともなお支部活性化に励んでいきたいと思う。なによりもコロナ禍の早期終息と令和3年度支部活動の正常化を願うばかりである。

事務局渡部展雄記

支部活動報告（2021 年４月～６月）

支部山行委員会の組織改編

小柳安弘山行委員会代表が 3 月末に日本山岳会を退会したことに伴い、山行委員会は事業委員会に統合した。事業委員会の活動は未定であるが、今後の活動に期待したい。

支部事業委員会三瓶恵子代表

JAC 支部会員 個人山行の紹介

令和３年度第一・四半期の支部主催活動はなかったため、以下個人山行を掲載し、活動報告とします

4.23 東吾妻～前大巓残雪期登山

8:00 高湯ゲートから兎平駐車場へ。ここから残雪のなか東吾妻山直登。11:00 山頂到着、360 度の展望を楽しみ鎌沼へ下山。11:30 雪稜を登りかえし 12:45 前大巓山頂着。山頂ではブッシュと虫に悩まされながら 14:00 浄土平まで下山。

佐久間隆夫、幕田芳典

東吾妻山頂から中吾妻方面

前大巓南斜面を直登

5.6 安積山(額取山)登山

「安積山　影さへ見ゆる　山の井の
　　浅き心を　我が思わなくに」

と万葉集に詠まれた郡山の安積山(別名額取(ひたいどり)山)。

9:30 萌黄色に輝く磐梯熱海登山口から往復。登山開始から約 30 分の急登をつめ 11:30 山頂到着。山頂から那須連山、磐梯山と猪苗代湖、安達太良・吾妻の遠望を楽しんだ。　佐久間隆夫、幕田芳典　他１

安積山頂から磐梯山猪苗代湖

5 月 10 ｼﾓﾌﾘ～駱駝山～一切経登山

7:50 残雪の中登山開始、9:30 駱駝山頂、途中雪渓直登と藪漕ぎに喘ぎ 10:30 一切経山頂着。
山頂から開眼した五色沼(魔女の瞳)を楽しみ、浄土平へ下山。佐久間隆夫、幕田芳典

5.14 6.12 小国沼登山(雄子沢コース往復)

5 月 14 日と 6 月 12 日の個人山行。雄国沼 5 月の雪解け、1ヵ月後草木の芽吹きを見比べてください。

5 月中旬、もうすぐ湿原と沼はニッコウキスゲの季節へ。

佐久間、幕田、他 1 名

6 月 12 日、伊藤義男会員と山仲間が訪れた雄国沼の景色。コバイケイソウ、ニッコウキスゲが咲き誇っていた。

85 歳の現役でバリバリで頑張る伊藤義男会員(左)と山仲間
～6/22 撮影～

5 月 20 日会津駒登山

6:30 滝沢登山口出発。水場付近を過ぎたあたりから一面雪原となる。シラビソとブナの大木を過ぎ稜線に出ると右に大戸沢岳稜線、左に燧ヶ岳が見えてくる。
森林限界も過ぎ、稜線左に巻いたところで突然会津駒が姿を表す。11:10 駒の小屋到、1 時間の昼食タイム。天候急変の兆しを認め山頂あきらめ下山
(佐久間隆夫、幕田芳典)

駒山頂付近から中央燧ケ岳と右至仏山

会津駒の山容

左奥が至仏山　中央右に平が岳と越後三山を遠望

雪に埋もれた駒の小屋と会津駒山頂。駒大池は深い雪の下、7 月にはハクサンコザクラが咲き競う。

会津駒岳山頂

5.25 南蔵王縦走（苅田峠 杉ヶ峰 屏風岩 不忘山）

7:45 霧雨の中エコーライン南蔵王縦走口出発。途中濃霧で視界利かず、沿道のｼｮｳｼﾞｮｳﾊﾞｶﾏを楽しみながら登る。10:45 屏風岳付近から天候回復の兆あり。11:40 南屏風岳～鋭鋒不忘山の稜線に咲くﾊｸｻﾝｲﾁｹﾞﾋﾒｺｻﾞｸﾗ ﾐﾔﾏｷﾝﾊﾞｲ ｲﾜｶｶﾞﾐ ﾐﾈｻﾞｸﾗの花々を楽しんだ。
佐久間隆夫ほか知人 2 名

鋭鋒不忘山

6月5日　鬼面山花ウオーク

9:30 野地温泉出発、10:50 鬼面山山頂到着。鬼面山花ウオーキングとしゃれこんだが、目的のアヅマシャクナゲ、レンゲツツジには早く、を目当てにしていたが残念ながらまだ早く、満開のムラサキヤシオ、登山道周りのイワカガミ、ツマトリソウ、マイヅルソウ、ミネズオウが咲き競っていた。とても贅沢な半日を過ごした。

～佐久間隆夫単独登山～

6月10日　本名御神楽岳登山(1 泊 2 日)

会越の谷川岳と呼ばれるこの山は、越後と本名御神楽岳という 2 つの山頂が連なる幽谷の霊峰で、急峻なスラブ帯は容易に人を寄せ付けず、このため沢好き岳人によく知られた場所でもある。今回は山頂直下の避難小屋に一泊、一般登山道往復ながら迫力ある山行となった。

○ 1 日目（6 月 10 日）

7:30　只見川本名ダムサイトから林道を車で進み、霧来沢登山口から入山。9:50 杉山ヶ崎～12:40 御神楽岳避難小屋着。17:00 本名御神楽岳往復(泊)。

○ 2 日目(6 月 11 日)

3:30 起床、ご来光を山頂で仰ぎ 6:30 避難小屋から下山、 1 1:0 霧来沢登山口着

～幕田芳典　佐久間隆夫～

避難小屋

目覚めの御神楽岳つばくろ尾根と霧北沢

事務局からのお知らせ

日本山岳会「山岳古道調査」ご支援のお願い

古道調査・発掘について

前号でお知らせした日本山岳会創立 120 周年記念事業「山岳古道発掘」調査の続報です。

本部プロジェクト（PT）から第一次対象古道として示されたのは下記 4 か所です。

1　八十里越～福島支部、越後支部
2　六十里越古道～福島支部、越後支部
3　大峠（会津中街道）～栃木支部、福島支部
4　沼田・会津街道～福島支部、群馬支部

このうち、 2 と 4 は他支部、および福島支部所属外の個人会員が推薦した古道で、今後推薦支部(個人会員)との協議を経て実施することにします。

今後の現地調査方針等

1　パイロット版の作成と各支部への配布

本部 PT が調査の統一を期するため、調査対象をピックアップして調査に入り、その手本としての「パイロット版」を作成、これを参考に各支部は調査を行う。

2　福島支部の方針

7 月以降対象古道の調査を実施。その第一弾として 7 月 14 日(水)、佐藤支部長、菊池副支部長、小林顧問、渡部事務局長が只見町の現地調査を行う。

以上の予定です。

なお前号でお示しの

万世大路～福島市と米沢市を結ぶ明治開鑿の古道
米沢街道～徳川時代米沢藩の参勤交代道
旧越後街道～英人女性探検家イザベラが世界に紹介
太閤道～豊臣秀吉が戦国時代奥州仕置きで通行した道
吾妻神社への参拝古道～信仰の山岳修験道

については、本部 PT の 2 次、3 次選定に従がって調査する予定です。　以　上

E:mail アドレスの調査結果とお願い

前号でお願いした会員個人の Email（メール）アドレス設定と通信確認の結果は、40 名中複数の方が未回答でした。

デジタル化の進展に伴い、今後福島支部と会員間の通信については、経費節減と併せて迅速・正確な情報のやり取りを推進しますので、メールアドレスの設定と事務局への連絡をお願いします。

福島支部アドレス　fks@jac.or.jp

日本山岳会福島支部アーカイブス

緑樹山荘ふたたび

6823 逸見征勝　寄稿

とっくの昔に忘れていたこと、たとえば地名や人名などさまざまだが、不意に話題になっておどろく場合がある。そして、遠回りしながら帰ってきた記憶の迷子たちは大切な思い出をともなう。

平成30年11月のはじめ……、薄曇り。紅葉を見にきた男沼はまずまずの色付きだったが人気（ひとけ）はなかった。すこし早めの昼食を終え、カップ付きのコーヒーを半分ほど飲んだとき、４人の登山者がやってきた。いずれも70代、一人は小柄ながら顔が黒く、どんな山でも易々と登ってしまいそうな威圧感がただよう。山男に話し掛けてみた。

「もっと陽差しがあればもみじの色が冴えたでしょうね。昨日までは天気がよかったのに……」

山男はそんなことには関心を示さずこう言った。

「家形山のふもとに緑樹山荘という山小屋があります。昔は冬は何日もあそこで過ごしたものでした」意外な言葉に内心動揺した私は、「たしか東海大の山小屋でしたね。私も仲間と慶応吾妻山荘に泊まり、翌日は緑樹山荘、そして板谷へとツアーをしました。赤い屋根のしゃれた山小屋でした。」

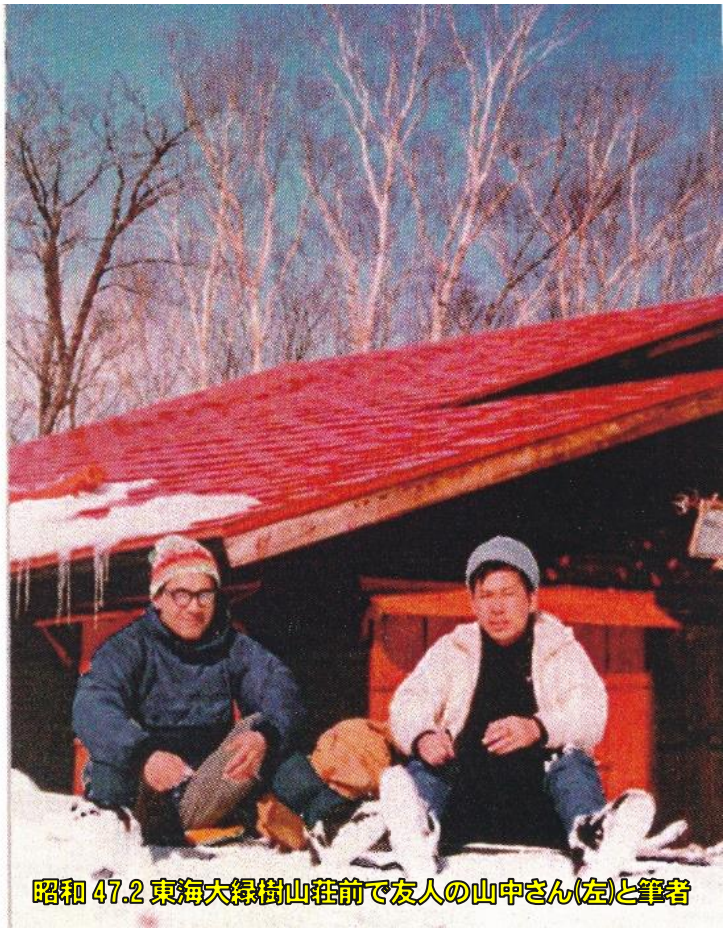
４人は東海大のOBで山小屋をほめられてうれしそうだった。遠いところから紅葉を見にきたのだからと思い、カエデが最も赤くなった場所へ案内した。道々、緑樹山荘へは今も無雪期に行けるのかと別のOBにたずねられた。かつては硯石の先から右に折れると「青木コース」とよばれる登山道があり、緑樹山荘へと続いていた。そこを最後に歩いたのはだいぶ前の秋で、板谷まで誰にも会わずに下った。40年から50年ほど前だと記憶しているから、すでに深いヤブにおわれているだろう。

昭和40年代、五色・沼尻コースとよばれたツアーコースを数回滑った。緑樹山荘はその途中にあって家形ヒュッテからしばらく下った平地につつましい姿で建っている。私たちは赤い屋根の山小屋の前でスキーをはずし、決まったようにコーヒータイムをとった。周囲を囲んだダケカンバがとても似合う山小屋で、厳冬期でも中から水音が聞こえていた。

何回かは吹雪の日もあったはずだが、よみがえる日はどれもが小春日和とでも言いたいほどおだやかである。一面のふかふかした雪が放つ光を浴び、「森の小人」があらわれそうな山小屋の前で私たちはつい長い休憩をとった。そして、こんな別天地にいつ山小屋を建てたのだろう、命名したのは東海大の誰だったのかなどと思いをめぐらした。

ささやかな登山であったかもしれないが、不思議に満ち足りたことばかりが心の奥からわいてくる。東海大のOBにとって、自分たちの山小屋への思いはなおさらであろう。福島の男沼で緑樹山荘について語ることなど予期せぬ出来事だったはずである。

歳月が経つにつれ、あのときの山仲間と登る機会はなくなったが、緑樹山荘の名はこの日からしばらく離れることはなかった。



昭和 47.2 東海大緑樹山荘前で友人の山中さん(左)と筆者